

主 題：主からの祝福を忘れない 5

聖書箇所：コリント人への手紙第一 1章7節

1コリント1章をお開きください。

私たち神の恵みによって救われた者たちは、主からの恵みを、祝福をしっかりと覚えて歩むことが必要であると、その祝福を忘れてはならないのだということを教えられています。

1. 「主の恵み」をいただいた 1節

我々クリスチャンというのは、主からの恵みをいただいた者で、それは100%神の恵みであり、我々が何かをしたからではなく、神が一方的に備えてくださった。

2. 「主の所有」とされた 2節

私たちは神に属する者に変えられた。

3. 「神からの恵みと平安」をいただいた 3節

そして神様から神の恵みと平安をいただいた。

4. 「救い」 4節

我々を救うために神は私たちが想像もできないような大変大きな犠牲を払ってくださった。

5. 「主の豊かさ」をいただいた 5節

そして私たちは主の豊かさをいただいた。

前回見たように、神は私たちがただ罪から救ってくださっただけではない。永遠の滅びから救ってくださっただけではない。私たちが新しく造り変えてくださった。そこでパウロは「ことば」と「知識」ということをあえて強調して、この点において私たちは特に変えられているのだということを教えたのです。救いにあずかった私たちは、

- ・主がお喜びになることを話す者へと変えられ続けている。
- ・主がお喜びになることを実践する者と変えられ続けている。

そして、私たちが主が喜んでくださる者へとこれからも変えられていくために、そのような者として生きていくために必要なすべてのものを神は豊かに十分に備えてくださった。そのことを忘れてはならないと教えます。

私たちは救いが神様からのすばらしい祝福だということを知っています。救いというのは我々が新しく生まれ変わることであり、みことばは何度も繰り返し私たちに教えてくれています。キリストがなぜあなたのために死んでくださったのか、それはこのイエスを信じる者、つまり「生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるため」であると。2コリント5：15のみことばです。これまでは自分のために生きてきた私たちが、救いにあずかった時からこの神のために生きる、そのように変えられたということです。

また、ペテロも同じように1ペテロ4：2-4で「こうしてあなたがたは、地上に残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。あなたがたは、異邦人たちがしたいと思っていることを行ない、好色、情欲、酔酒、遊興、宴会騒ぎ、忌むべき偶像礼拝などにふけたものですが、それは過ぎ去った時で、もう十分です。彼らは、あなたがたが自分たちといっしょに度を過ぎた放蕩に走らないので不思議に思い、また悪口を言います。」と言います。つまり生き方が変わるということです。これまでは平気で行ってきたことがイエス・キリストを信じて救いにあずかった途端、できなくなるという話です。これが救いです。神が私たちが新しく造り変えてくださる。自分のために生きる人生から神のために生きる人生に、自分を喜ばせる人生から神を喜ばせる人生へと神が変えてくださるのです。この新しい日々を過ごすために必要なものを神が十分に備えてくださった。この恵みをこの神様からの祝福を忘れてはならないと。

6. 「霊的賜物」 7節

六つ目の祝福は7節の初めに出てくるのですが、霊的賜物という祝福です。7節「その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けることなく、」と書かれています。つまりこの箇所でパウロが教えようとするのは、すべてのクリスチャンには神様から霊的な賜物が与えられているということです。実はそのことがここに書かれているのですが、今お読みした7節の初めのところで皆さんには特に三つのことばに注目いただきたいと思えます。「その結果」という接続詞と「欠ける」という動詞、そして「どんな」という形容詞です。実はこの三つのことばが我々信仰者にはみんな例外なく霊的賜物を与えられていることを教えているからです。

1) 「その結果」

まず、「その結果」という接続詞は日本語ではこのように訳されていますが、ギリシャ語のこの接続詞の後に不定詞がついている場合、これは予期されていた結果を表しています。まさにここで「その結果」と訳されている接続詞の後に「欠ける」という動詞が不定詞で続きます。このように並んでいる場合、6節でパウロが改めて教えた救いに伴う結果をこの7節の初めで言ったのです。前回私たちが見たのは、救いにあずかった人々は言動において全く新しく変えられるということでした。なぜかという、その人は救われているからだ。では、救われた人々には当然このような結果が伴うのだというのが7節の初めの接続詞が我々に教えてくれることです。ですから救いにあずかっている人々にはみんな共通して、次に見て行くことが伴うということです。

2) 「欠ける」

二つ目のことばは「欠ける」という動詞です。このことばの意味は「何かを持っていない」とか、「獲得に失敗する」、「獲得し損なう」、「獲得するのをしくじる」といった意味です。一体何に関しての話かということ、賜物に関するのだということがわかります。しかもこれは「欠けるところがなく」と否定しています。つまり「持ってないことはない」、「持っている」ということです。獲得に失敗したのではなくて、必ず獲得に成功しているということです。し損なったのではなくてちゃんとあなたはそれを獲得している。賜物を獲得したのだと7節は教えるのです。

3) 「どんな」

もう一つは「どんな」という形容詞ですが、これは「ひとつの～もない」とか「だれも～でない」という意味です。そうするとこの「どんな賜物にも欠けるところが」ないというのは、「あなた方は一つの賜物も持ってないことはないのだ」ということです。つまり「一つ以上の賜物を持っている」ということです。賜物を持っていないクリスチャンというのはひとりもないということです。それがこの中でパウロが教えたことです。

しかもパウロはこのメッセージをコリントの教会に送っています。コリントの教会というのは信仰が非常に幼く、霊的に未熟な人たちの集まりでした。また悲しいことに教会の中には大変大きな罪も存在していました。しかし、パウロは信仰の成熟度に関係なく、このコリントの兄弟たちには賜物が与えられているのだと断言するのです。そしてこのテキストがあなたに教えているのは、信仰者であるならば、あなたにも霊的賜物が与えられているということです。まずそこだけはしっかりつかんでおきましょう。

この霊的賜物について学ぶ

私たちが今から見ていきたいのは、この霊的賜物とはどういうものかです。それはあなたが主からいただいた大切な働き、あなたに与えられた重要な務めをあなた自身がしっかりと覚えるためにです。神様があなたに霊的賜物を与えてくださったのは、神はあなたに大切な務めを与えてくださっているのです。願わくばそのことを我々がしっかりと汲み取ることができればと思います。

1. 「賜物とは？」

ここにある「賜物」ということばは、ギリシャ語の「カリスマ」ということばが使われています。これは「ギフト」という意味です。「神様の恵み」とか「恩恵の賜物」、特に「霊的賜物」と訳します。新約聖書の中にこのことばが17回出てきます。1コリント12：11に「しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのである」とあります。これは「同一の御霊がこれら……のことをなさる」、つまり聖霊なる神様のみわざであるということです。では聖霊なる神様が何をするかということ、ご自身のみこころのままに、ご自身が判断し、ご自身が決定されるのです。ご自身の「みこころのままに、おのおのに（ひとりひとりに）それぞれの賜物を分け与えてくださる」と。ですから、この箇所が我々に教えているのは、救いとともにお霊の賜物というのは神様からの贈り物であって、あなたや私の選択によるのではないということです。例えば私たちは誰かを見て、あのような賜物が欲しいとか、このような賜物が欲しいとか、そのようなことを願ったとしても、我々はそれを手に入れることはできないということです。これは神ご自身が選ばれ、神ご自身のなさるみわざだと言うのです。

ウィリアム・バークレーはこう言っています。「代価なしに与えられた賜物、自分はそれに値せず、自分の力では到底手に入れることができないような賜物である」と。つまり私たちがどんなに願っても、どんなに頑張っても自分の意思でもってこの賜物を手にすることができない神からのギフトなのです。自分の願いで賜物を得ることはできない。

実はそのことを私たちに教えてくれる聖書のある出来事があります。シモンという一人の人物です。この人物は金でもって神の賜物を買おうとした人物です。そのことが記されているのは、使徒8：18

ー19です。非常にいろいろなことが教えられる出来事です。「使徒たちが手を置くと聖霊が与えられるのを見たシモンは、使徒たちのところに金を持って来て、『私が手を置いた者がだれでも聖霊を受けられるように、この権威を私にも下さい。』」と。誰のところにいったのかというと、それはペテロとヨハネです。彼らが「手を置くと聖霊が与えられる」のを見て、シモンは是非自分もそれを手にしたいと。そこで使徒たちのところへ出て行き、金でもってそれを買おうとしたのです。それに対するペテロの答えが20節に出ています。「ペテロは彼に向かって言った。『あなたの金は、あなたとともに滅びるがよい。あなたは金で神の賜物を手に入れようと思っているからです。』」、つまりペテロは金でもって賜物を得ることはできないということを教えたのです。なぜなら今見てきたように、これは自分の力では到底手に入れることができない神の賜物なのです。バークレーが言ったとおり、私たちが願っても欲しいものを手にすることはできないのです。

私たちが覚えておかなければいけないことは、イエス・キリストの救いにあずかったならば、神はあなたに特別な賜物を下さいます。それは、周りの人と比較してどっちが偉くてどっちが偉くない、そんなことをするためではありません。神はあなたに特別な賜物を下さった。あなたにだけ与えられた賜物です。同じ賜物を持っている人はこの世界じゅうに二人としていないのです。ですからこのシモンが大きくここで神様によって教えられるのです。それはこの神の賜物というのは神からのギフトであって、私たちがどんなに欲してもそれを得ることはない。

◎ 聖霊の賜物

この出来事は、ペテロとヨハネがサマリヤに出かけて行き、イエス・キリストを信じた人々に聖霊を与えた時のことです。使徒8：14-17「さて、エルサレムにいる使徒たちは、サマリヤの人々が神のことばを受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネを彼らのところへ遣わした。ふたりは下って行って、人々が聖霊を受けるように祈った。彼らは主イエスの御名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊がまだだれにも下っておられなかったからである。ふたりが彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。」、サマリヤの町でこういう出来事があったのです。実はこの背景にはピリポというひとりの伝道者が働きをするのです。この伝道者ピリポというのは十二使徒のひとりではありません。十二使徒の中にもピリポという人物が出てきますが別の人物です。この人物は福音を携えて、まさに伝道者としてキリストのすばらしさを伝えます。サマリヤの町に彼がやって来た彼は福音のメッセージを語り、数々の奇跡をなすのです。そして人々は主イエス・キリストを信じたのです。12節に「ピリポが神の国とイエス・キリストの御名について宣べるのを信じた彼らは、男も女もバプテスマを受けた。」とあります。彼らは本当に救われたのです。ところが、今お話ししたように、彼らは聖霊を受けていなかったのです。私たちがみことばから学んでいるのは、イエス・キリストを信じた者には聖霊が与えられ、別の言い方をすれば、聖霊をいただいているから救われているということです。聖霊をいただいなければ救われていないのです。そうすると、なぜこんなことが起こったのか不思議だと思いませんか？彼らは信じたのです。なぜ彼らが本当に信じていたとわかるかということ、ペテロとヨハネがサマリヤを訪問して彼らと出会った時に、彼らの信仰を疑っていません。彼らはサマリヤに下って行って人々が聖霊を受けるように祈ったのです。そして聖霊を受けたのです。ということは、彼らは確かに救いにあずかっていたのです。救いにあずかっているながら、あなたと同じようではなかったのです。彼らは聖霊をまだいただいていたのです。なぜこんなことが起こったのでしょうか？

それはこういうことなのです。エルサレム教会、特に信仰にあずかったユダヤ人たちが神の救いのみわががユダヤ人だけに限定していないということを悟るためだったのです。彼らはこの神の救いの恵みは自分たちだけではなく、すべての人に及ぶのだということを学ぶ必要があったのです。実はそのことがこの後の出来事によって明確になっていきます。というのは、この後10章で、ある異邦人が救いにあずかる様子が記されています。それはコルネリオという人物です。ヨッパにいた彼らは地中海の沿岸をずっと北に上ってカイザリヤに行きます。ペテロがそのコルネリオの家に招かれていくのです。そしてその家に入った様子が10：27に出ています。ペテロたちは「それから、コルネリオとことばをかわしながら家にはいり、多くの人が集まっているのを見」たのです。そして28節「ご承知のとおり、ユダヤ人が外国人の仲間にはいたり、訪問したりするのは、律法にかなわないことです。」と彼らに言うのです。これはユダヤ人らしいでしょうか？自分たちは神の選民であるユダヤ人であって、異邦人たちと交わることをしないと。「ところが、神は私に、どんな人のことでも、きよくないとか、汚れているとか言ってはならないことを示してくださいました。それで、お迎えを受けたとき、ためらわずに来たのです。そこで、お尋ねしますが、」と言って、どういういきさつで私を招いたのかとペテロは尋ねます。そしてコルネリオがそれに答えていく様子が30-33節に出ています。それを聞いたペテロは、これは神の導きだと確信するのです。そしてペテロがイエス・キリストのことを宣べ伝えた後、44-47節「ペテロがなおもこれら

のことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった。割礼を受けている信者で（これはユダヤ人で信仰を持った人たちのことです）、ペテロといっしょに来た人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたので驚いた。彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。そこでペテロはこう言った。『この人たちは、私たちと同じように、聖霊を受けたのですから、いったいだれが、水をさし止めて、この人たちにバプテスマを受けさせないようにすることができましょうか。』と。

コルネリオの家に招かれたペテロ、彼の家にはたくさんの人々が集まっていました。ペテロは彼らにイエス・キリストの救いを語り、メッセージを聞いていた人々に聖霊が下ったのです。救われたということです。確かにみことばの中に明確に記されていませんが、聖霊を受けたということは彼らが救われたということです。そして、ここにあったように彼らに聖霊が与えられ、そして彼らが異言を話した。このようなことが起こったと書かれています。

さて、このようにペテロたちが異邦人のところに行ったのを知ったエルサレムの特に信仰に至ったユダヤ人たちは疑問を抱くのです。その話が11章に出てきます。なぜ異邦人のところに？そう問いかける彼らに対してペテロは自分たちが経験したことを証するのです。11：15節をごらんください。これは先ほど見たコルネリオの家での話です。「そこで私が話し始めると、聖霊が、あの最初るとき私たちにお下りになったと同じように、彼らの上にもお下りになったのです。」と。ペテロは先ほど我々が見た10：47で「この人たちは、私たちと同じように、聖霊を受けた」と言っています。11：15でも「聖霊が、あの最初るとき私たちにお下りになったと同じように、彼らの上にもお下りになった」と。ペテロは自分が体験したことは、私たちユダヤ人（ほとんどがそうでした）が体験したある出来事と同じことが起こったと言っているのです。それはペンテコステです。使徒2：4にその時の出来事があります。「すると、みな聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで」、これは異言です。訳のわからないことばではない、はっきりとした外国語で語ったと。今ペテロが語ったことを思い出してください。コルネリオの家で福音を語っている時に、それを聞いていた者たちは信じ、そして彼らは聖霊を受け、異言で語ったと。ペテロたちはその光景を見た時に、これは私たちがあのペンテコステで体験したのと同じではないかと。聖霊が私たちの上を下り、私たちは外国のことばでしゃべったと。それと同じことが起こったと。

きょう私たちが見た使徒の働き8章のところで、ペテロたちがサマリヤの町を訪問して、祈って手を置いた時に、なぜ聖霊を受けたのかおわかりになるでしょう？自分たちユダヤ人に起こったのと同じことが異邦人にも起こったのです。つまり神様の救いというのはユダヤ人に限定されたものではなくて、そこにはすべての人が含まれるのだと。自分たちが体験したのと同じことを異邦人のうちに見たのです。そして彼らは神の恵みがすべての人に及んでいることに気づくのです。これが目的だったのです。このようなみわざを通して、神は異邦人にも救いの御手を差し伸べた。しかし、この後私たちがみことばを見て行く時に、どこかで異邦人が救われたらエルサレムから使徒を呼んで来て、手を置いてもらって聖霊を受けるということは出てこないのです。徐々に徐々にそうして変えられていくのです。確かにこの時はこうして理由があったのです。でもイエス・キリストを信じることによって私たちは聖霊をいただくのです。だれかに来てもらって手を置いてもらって聖霊をいただくのではないのです。イエス・キリストを信じる信仰によって私たちは聖霊なる神様をいただく、それこそが救われたことの証拠なのです。

◎ 異端者シモン

さて、御霊の賜物について学んでいくのですが、その前にもう一つだけ。ピリポがサマリヤの町で働きをしていた時に、先ほどからお話ししているシモンという人物のことが使徒8：9に「以前からこの町で魔術を行なって、サマリヤの人々を驚かし、自分は偉大な者だと話していた。」と出てきます。魔術を行って、いろいろな奇跡を行っていたのでしょう。そして人々は彼を信じた。なぜかという、長い間その魔術に脅かされていたからだ。そしてピリポがキリストの福音を語った時に、多くの人々が信じるのですが、13節に「シモン自身も信じ」たと書いてあります。「シモン自身も信じて、バプテスマを受け、いつもピリポについていた。そして、しるしとすばらしい奇蹟が行なわれるのを見て、驚いていた。」と。魔術を行って人々を惑わしてきた人物が信じてバプテスマを受けたとあります。恐らくこれをお読みになると、神様の恵みはすごいよね、このシモンにも救いが与えられたのだと取られる方もおられると思います。もちろんどんな罪人でもイエス・キリストの救いにあずかることができます。どんな罪人でも罪を赦していただいて救いにあずかることができます。

ではこのシモンはどうだったか、しばらくの時間、このシモンについて学んでおきたいと思います。というのは、私たちは何度も繰り返し救いについて学んできています。そこで私たちはこの人物の救いについて少し考えてみたいと思います。果たしてシモンは救いにあずかっていたのかどうかです。結論

を言うと、恐らく彼は救われていなかった。彼は信じたのでしょうか？そして彼はバプテスマを受けたのでしょうか？と言われるかもしれません。ではなぜ救われていなかったと断言できるのか、今から理由を説明します。

① ペテロの叱責のことばによって 20、21、23節

まず彼に対する叱責の数々です。ペテロが「あなたの金は、あなたとともに滅びるがよい。」と言います。なかなか日本語に訳すのは難しかったと思います。英語にフィリップス訳というのがありますが、それを日本語に訳すと「おまえとおまえの金は一緒に地獄行きだ」となります。大変厳しいことばです。そんなことを救いにあずかっているクリスチャンに言います？ペテロがこのシモンに対してどのように言っているのです。

また21節を見ると、「あなたは、このことについては何の関係もない」と言っています。神の賜物の話です。これについてあなたは無関係だ、「それにあずかることもでき」ないと。それは「あなたの心が神の前に正しくないから」だと。こんなことを救いにあずかっている人に言います？

また23節「あなたはまだ苦い胆汁と不義のきずなの中にいることが、私にはよくわかっています」と、少し変わった表現が記されています。この「苦い胆汁と不義のきずなの中にいる」というのは、神への最も大きな罪を表す旧約聖書の表現です。申命記29：18に「万が一にも、あなたがたのうちに、きょう、その心が私たちの神、主を離れて、これらの異邦の民の神々に行って、仕えるような、男や女、氏族や部族があってはならない。」、まことの神から離れて神でないものを崇拜するようなことがあってはならないと。そしてその後こう続くのです。「あなたがたのうちに、毒草や、苦よもぎを生ずる根があってはならない。」と。これは彼らの心の状態を表しているのです。あなたがまことの神から離れて偽りの神々に行こうとするなら、それは神に対する大変大きな罪だと。その表現をここで使っているのです。「あなたはまだ苦い胆汁と不義のきずなの中にいること」、つまりペテロはシモンという人物の心の中がよくわかっているのです。あなたの心はまだ神の前に正しくない。こういう叱責のことばはクリスチャンに対して使うものではありません。

② 自分の犯した罪を認識していない 24節

また同時にこのシモン自身を見た時に、彼の本当の姿が見えます。というのは金で神の賜物を買おうとした時に、それはできないと否定されます。そして22節「だから、この悪事を悔い改めて、主に祈りなさい。あるいは、心に抱いた思いが赦されるかもしれません。」と、ペテロたちはあなたは大変大きな罪を犯したからそれを神の前に悔い改めなさいと言ったのです。ところが、24節で「あなたがたの言われた事が何も私に起こらないように、私のために主に祈ってください。」とシモンは言います。シモンはペテロたちが言ったさばきが自分の身に起こらないことを祈ってもらおうとした。彼の関心はこのさばきから逃れることしかなかったのです。つまりシモンは自分が犯した罪を認識していないのです。ペテロが言ったのは、あなたは神に対して罪を犯したから罪を悔い改めなさいでした。本当の自分の罪がわかっているならば、神様、私はあなたに対して大変大きな罪を犯した、赦してくださいと神の前に悔い改めましょう？この人物がしたことは、さばきが私の身に起こらないように祈ってほしいと願ったのです。

この会話を聞くと、イエス・キリストを信じるこの救いが、ただ地獄からの救いだと私たちが考えているとしたら問題ではありませんか？罪を犯したら、その結果として永遠の地獄があると、確かに聖書はそう警告します。私は永遠の地獄に行きたくないからイエス様を信じます。果たしてそれは本当の信仰かどうかです。私たちが気づかなければいけないのは、私は生まれてからイエスを信じるまで神に逆らい続け、神の前に大変大きな罪を犯した罪人であり、私は自分の努力をもってその罪から解放されることはないということです。この罪の力は私に余りにも強力過ぎて、私はこの罪の力から自分自身を解放する力も術も持っていない。罪を犯したゆえに、神の永遠のさばきを受ける運命が定まっている。そこから私は自分を救い出すことができない。そのことに気づいた罪人は、自分が本当に神の前に罪を犯した罪人であることをしっかりと自分で認識した上で、唯一の希望であるイエス・キリストのもとに救いを求めて出てくるのです。ペテロは罪を悔い改めなさいと言いました。シモンは罪を悔い改めるところか、そのさばきが自分に起こらないように祈ってくれと。罪の認識を全く見る事ができない。

これを見る時、あなたはイエス様を信じたと言っておられる。でもあなたがただ永遠の地獄から救われたいからイエス様を信じたのであったとすれば、考えてみなければいけない。あなたは本当に生まれ変わっているかどうかです。あなたのうちに聖霊がいるかどうかです。聖霊があなたのうちにいるならば、聖霊はあなたに神に喜ばれる生き方をしていきたいと、間違いなくあなたのうちに働くはずで。主の栄光を現したいというそんな思いがあります？主に喜ばれたいという思いがあります？主のために生きていきたいという思いを持っています？それともただ地獄から救われたことだけを感謝しているのでしょうか？

③ 教会史の記述によって

三つ目にこのシモンが救われていなかったと言える証拠は、教会史です。シモンに関することが教会史の中に出てくるのですが、彼のことを「異端者」として記しています。そして紀元100年にピリポが伝道したサマリヤで生まれたひとりのクリスチャンがいます。その人の名前はラテン語だったら殉教者ユスティノスという名前です。英語だったら殉教者ジャスティンと言われています。彼は紀元100年から165年に生きた人物です。この人物も同じようにシモンに関して彼が異端者であったことを記しています。

もちろん私たちはその心のすべてを知ることはできません。でもこういった証拠から恐らくこの人物は救いにあずかっていなかった。信じたのです、バプテスマを受けたのです。でも救われていなかった。問題なのは私たちの心です。神が見ておられるのは心です。例えばほかの人と同じように、イエス様を信じるかと聞かれたらそれに応答するかもしれない。みんなと同じようにバプテスマを受けるかもしれない。でも、問題はあなたが心からイエス・キリストの救いを受けているかどうかです。神があなたを新しく生まれ変わらせてくださったかどうかです。このシモンの話を見た時に、どうしてもこのことをご一緒に見て行く必要があると思いました。

2. 「賜物の種類」 1コリント12：4

きょうのテキストに戻ってください。賜物というのは神様からのギフトだということを見てきました。簡単に賜物の七つの種類を見ます。賜物の種類についてはコリント12章に入った時にもう少し詳しく見ていきます。ですから今はどんな種類があるのかを紹介します。

1) 預言

それは神からの啓示を受けてそれを語る人です。預言者というのは神に代わって、神の名によって語る者たちです。

2) 奉仕

これは物質的、身体的必要に関する憐れみの奉仕という意味があります。物質的にも身体的にも何か必要を抱えている人に憐れみを示すこと。そういう人たちのために仕えることです。

3) 教える

この賜物はみことばの真理を人々にわかりやすく伝えるということです。

4) 勧める

これは人々を時に励ましたり、時に慰めたり、時に戒めたりすることです。そうすることによって主の真理に従順に従っていくように励ましていくのです。そういったことをされる皆さんがおられるでしょう？罪の中にいる人にはあなた、間違っているよ。みことばが教えるように従っていきましょう。またそのように歩んでいる人を励ましてますますそのように生きていくように、そういう勧める賜物です。

5) 分け与える

これは必要に応じて与える人たちです。しかも喜んで惜しまずに与える人たちの話です。

6) 指導

これは治めるとか、管理するという意味のあることばです。教会とか家庭とか、そういったところにおけるリーダーです。教会なら教会をしっかり治める、整える、監督する、そういう務めです。

7) 慈善を行う

これは必要のある人々のところに出かけて行って働きをする。例えば苦しんでいる人、悲しみの中にいる人、そういう人たちを思いやって、そういう人たちを助けて行こうとする。

3. 「賜物の用途」

私たちにはいろいろな賜物が与えられています。最初から見ているように、あなたには必ず賜物が与えられている。では何のためにそれが与えられたのか、最後に目的です。

1) 人の益となるため 1コリント12：7

それは1コリント12：7が「しかし、みな**の**益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられている」と教えます。つまりあなたに与えられた賜物はあなたが一生懸命自分のうちに保つただけではないのです。それを実施に用いることが必要だということです。実はコリント教会の問題というのは、与えられた賜物の目的を正しく理解していなかったのです。ですから彼らは自分の霊性を誇示する道具として賜物を使っていたのです。私はこれだけの賜物を持っています、私の賜物はこんな賜物ですと言って、その賜物を比較しながら、どちらが優れているかということをしていたのです。全くナンセンスだったのです。賜物というのはそんなために与えられているのではない。あなたが賜物を使うことによって、人々が成長していくのです。人々が励まされていくのです。我々はそのためにいるのです。我々がもし自分に目を向けたら、みんなが私にとっても冷たいと言うかもしれない。何にも私のためにしてく

れないと。大切なことは私たちは自分の目を神に向けて人々に向けるのです。自分に何をしてくれるのではない、自分が何をするかです。そして私たちは人々の益になること、人々が成長するために仕えていこうとするのです。あなたに与えられた賜物は人々のために用いるのです。この教会の中であって、人々が成長するためにこの賜物が私たちに与えられているのです。

最後にこのことだけ皆さんにお話しして終わりましょう。前回私たちは、私たちがこの世の人々に対して私たちの神は我々を根底から生まれ変わらせることができるということを変えられた人生をもってあかししていく、そしてそのために必要なすべての恵みが与えられたのだということを見てきました。私たちは言動において変えられ続けていると。それを人々に示すことによって、私たちの神は私たちを新しく生まれ変わらせてくださる神なのだということを明らかにすると。我々は外の人々に対して我々の神のすばらしさを証するのですが、内側に向かって兄弟姉妹たちに対しては、お互いに励まし合いながら、お互いにこの霊的賜物を使い合うことによって成長していくのです。そしてその働きをするために、神様は十分に必要を与えてくださっている。だからあなたは世に対してすばらしい証人として生きることができるし、教会にあっては人々の祝福となって歩むことができる。そのためにすべてのものが与えられていると。

すごいと思いませんか？こんな計画を持って神はあなたを救ってくださり、賜物を与えてくださり、この祝福を下されたのです。世に対しても、兄弟姉妹に対してもこのような働き人として神はあなたを使ってくださいなのです。用いていただくことです。あなたを救ってくださった神様はあなたを用いてくださるのです。それをあなたが望むことです。あなたがそれを拒んでいるのなら、どうやって用いられます？しっかりみことばを覚えて、祝福をいただいた者として、そのすばらしい主に用いていただくことを期待しながら、それを願いながら兄弟姉妹たちの成長のために仕えていくことです。